「性別を持たない知的生命体は他者をどう愛するか」

柳　文仁

〈希系種のみが住む居住区にて〉

「へえ、それってホルモンを抑える薬？」

荷物を整理していると不意に話しかけられた。私より数齢幼いだろう、華奢な体躯で興味深そうに顔を突き出している者がいる。きれいな黒い瞳を輝かせ、透明な樹脂の容器に入れられた錠剤に熱い視線を注いでいる。どことなく感じられる艶めかしさと旺盛な活発さは放腺期を思わせた。

「そう、正式には抑腺剤」

「抑腺剤」

ゆっくりと噛みしめるように繰り返す。ここではホルモンを抑えておく必要がない。ほとんどの者にとって、居を構えてしまってからあえて外に出ていく理由もない。そのため、この町で抑腺剤を所持しているのは長か一部の渉外者、そうでなければ新参者か、私のような旅人だけである。また、希系種にはこの薬自体に嫌悪感を抱く者も少なくない。

「いつも飲んでるの？」

「いや、普段は飲まない」

「じゃあなんでこんなに持ってるの？」

「いざという時に困るから」

「いざという時って？　たとえば？」

希系種、遍系種の区別無く、為胎ホルモンの分泌が始まる時期には誰しも浮かれたようになり、ホルモンや幼い子供といったものに非常に強い関心を示す。

「……触ってもいい？」

おずおずと尋ねてくる。抑腺剤は、一般社会で暮らすためにはもはや必需品と言ってもいい。しかし、その効力は我々の生体の根幹である器官に作用するものであり、使用によく慣れた者であっても一歩間違えれば命に危険を及ぼすこともある。そのため、慣れない者には、殊に放腺期の敏感な若者にとっては畏怖の対象にすらなり得る。かつて私もそうだった。正しい扱いを学んだ今でも、恐ろしく感じることは決して稀ではない。

「かまわないよ、こっちが私たちが使うもの、こっちが遍系種の人たちのためのもの」